

心不全の「心臓再同期療法」

やまなし

医療最前線

県立中央病院から

心臓のポンプ機能が低下し、全身に十分な血液を送れなくなる心不全。重篤な患者に対し、新しいタイプのペースメーカーを埋め込み、心臓の左右心室に直接電気刺激を与え、収縮させる新たな治療法「心臓再同期療法（両室ペーシング療法）」が山梨県立中央病院で行われている。

心不全は心筋梗塞、拡張型心筋症、心臓弁膜症など心臓の病気が原因で起こる。同病院循環器内科の年間入院患者のうち、心不全の症状がある人は2〜3割の100人程度。このうち重症と診断されるのは20人程度だ。

息切れや呼吸困難を訴えて入退



梅谷 健
内科科長

《1》

薬量抑え息切れを軽減

院を繰り返す重症患者の5年生存率は50〜60%に達する。著しい機能低下や薬剤が効かない、こうした重篤な心不全への対処が課題となっている。

内科科長の梅谷健医師によると、心不全は内服薬で治療する。重篤になると入院し、強心剤などを使って心臓の収縮力を高める。最終的な手段として在宅酸素療法

や心臓移植などが選択されてきたが、両室ペーシング療法はこれらの治療法に比べ患者の体への負担が少ないのが特徴という。

同療法では左鎖骨の下を4センチ切り、3〜5センチ四方、重さ約30gのペースメーカーを埋め込む。術後は3カ月以内に1回の通院と、7〜8年に1回の電池交換が必要。

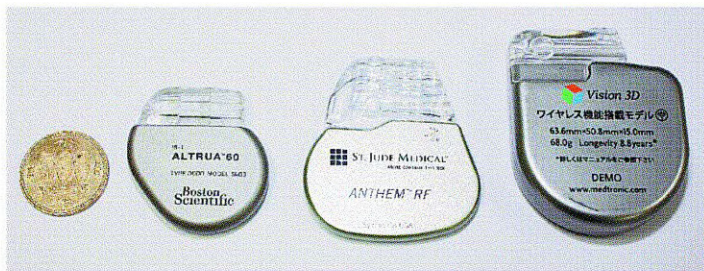
不整脈が出たときに自動で電気ショックを与え、脈を復帰させる除細動器の機能が付いたペースメーカーもある。

ペースメーカーで心臓の収縮が正常に行われることで、息切れなどの症状が軽くなる。服用する薬の量を減らすこともできる。2007年9月に同療法を採用してから、これまでの約4年間で21件（うち除細動器の機能付きは14件）の実施例がある。

梅谷医師は「両室ペーシング療法は慢性心不全や薬が効きにくい心不全に有効。年齢に関係なく治療が可能で、息切れなどを改善し、入院を減らすことが期待できる」と話している。



県立中央病院の最新医療をシリーズで紹介する。（第2、4金曜日に掲載します。次回は26日です）



右から両室ペーシング機能・除細動器付きペースメーカー、両室ペーシング機能付きペースメーカー、従来のペースメーカー（左端は500円硬貨）